[redacted]

湯と云ひけむを、処はかわりて其なるべし。…」

湯について述べている。

の砂湯は、俳人蝶亭起友が残し

（一四五）』に

なる竹田屋に草鞋を解く。夕げ

に入りて寝ばやと海辺に至り、異

まじりて砂に埋もれ一蒸しむしけ

夜十時）の月かすかに登りぬ。

身並ぶや夏の月

といふほどこそあれ。皆々浴衣は

ひなどして、おのがまにまに宿り

や東にあった旅籠である。「流川

絵図にも見える。また、その絵

づ、潮干ぬれば浴するもの多し。

を治すという」と書き込みがある。

漁談』に古市海岸の砂湯について

（流川）の邊にある温泉の傍らに熱湯あり。浴する風呂あり。是又きよし。町半ばに　川へ流る。此の川に温泉湧きいず。其下流に男女浴す。」

は長閑かな鄙びた温泉地であった。

前の人で地理学者の古川古松軒が、九州の旅とめた『西遊雑記』（天明三年・七七八三）に、ふ町に出る。ながながしき在町にて、家毎に此温泉は熱からずぬるからず、痔・腫物に効、入湯のもの来る所なり。…（彦山を立って）別府に来りし事なり。是までの宿々にては水臭気ありて、飯にも汁にも硫黄の匂ひうつり屈せし事なり。」

象を述べている。ながながしき道は往還の小境川を渡って天満の日暮庵から別府村に入り、を通り抜けて西法寺前、流川を渡って庄屋役場や秋葉神社の前を通り、やがて朝見川を渡っ福寺までつづく一本道であった。街道に沿っが続いていた。

延接（招き
や農家・漁
らに床机を
、日夜三味
」。
に登って、再
辺で酒杯を
、〈小秦淮〉
とは南京近
また一夜、
竹田を不興
黄築紀行』
濱脇の温泉

田野口三村
一八四二）、
いる。
是まで温泉
わしき女罷り

〈政年間、別府村には湯株を持っていた湯宿十八軒と
に湯株を獲得した湯宿が三軒あった（昭和八年版
府市誌）。起友が定宿にした竹田屋はその中の老舗
る。原典を見ないので詳しいことは分らないが、江
時代末になると元からある宿屋は、株仲間をつくって
益を守らねばならないほど、別府村の湯治宿は賑わっ
のであろうか。ちなみに湯宿をあげると

府内屋太郎兵衛　中津屋勘兵衛　天満屋三郎兵衛
伊豫屋利右衛門　三佐屋七郎右衛門　延岡屋孫之丞
田中屋茂平　杵築屋平兵衛　竹田屋喜右衛門
肖屋源左衛門　上角屋太郎兵衛　豊前屋兵左衛門
植田屋源右衛門　国東屋九郎右衛門　植田屋次郎兵
布屋平之丞　小倉屋勘右衛門　伊勢屋孫左衛門

新株三戸

竹田屋九兵衛　中津屋清右衛門　角屋六左衛門

ある。屋号から見るとかなり広範囲の客筋が窺われる。
湯宿の浴室について、佐賀藩の牟田文之助が安政二年
八五五）に別府村を訪れて、次のように日記にしる
ている。

）や長三州など
に潜伏し或いは
上にまつろわぬ

慶応四年四月の

幸い温泉これあ
座候て、春秋自
て候えばおよそ
湯宿屋一ケ年中
の者も湯治人あ
脇・田野口）の
で生計を立て）

然あいなり申す
など興行（し
き興行あい止り、
人気居り合いか
湯人も例年に比

六度七度浴みし、瀧に打たれ夜も再
夜しぬれば、晴る夜の星かと詠しも
詔の遠方に　あわれをよそう蜑のい
こえぬ山里の　ほのぼの白むしのの

乾海寺温泉」の漢詩がある。
石存するや存せざるや　飛降して九
温なり　地脈は喬嶽に通じ戦図は
化り滄海の色　渺漫として乾坤を

は「湯瀧」の項ですでに述べた。また、
れるように、「湯あみして心地よく
っくりと散歩しながら、宿でつくっ
伏の幾日かを送った。蘭室の観海寺
な雰囲気であったのであろう。

霊湯なり。されど湯勢乏しく湯井をなすほどのことにあらず。然るに君侯温泉をめでさせ給うことあるをかしこみて、一箇の湯坪となしたるなり。亭を設けて御休みの所となし侍るに、これに活然亭の号を下し給う。」

「もろもろの病を治すること神のごとし。この湯には村民または旅人らもよく入浴することをゆるす。来り浴びて湯験をしるべし。」

○伊麻井の湯

「いまいの湯は色にごりありて硫気つよし。尤この辺すべて一反歩も草生出ず。あまた地獄こゝかしこに湧出るなり。湯はいと和かにしてよく浴し温まりて家に帰り寝ぬるといえども冬夜も其の事を覚えず。近きあたりの農民終日山野田畑に業をなして帰る前には必ずこれに浴して家に帰る事なりとかや。

湯井一ケ所のみにして、入湯の旅人なども来れるほどの事にあらず。はた、この地獄にて常に里人の食物を蒸す事なり。」

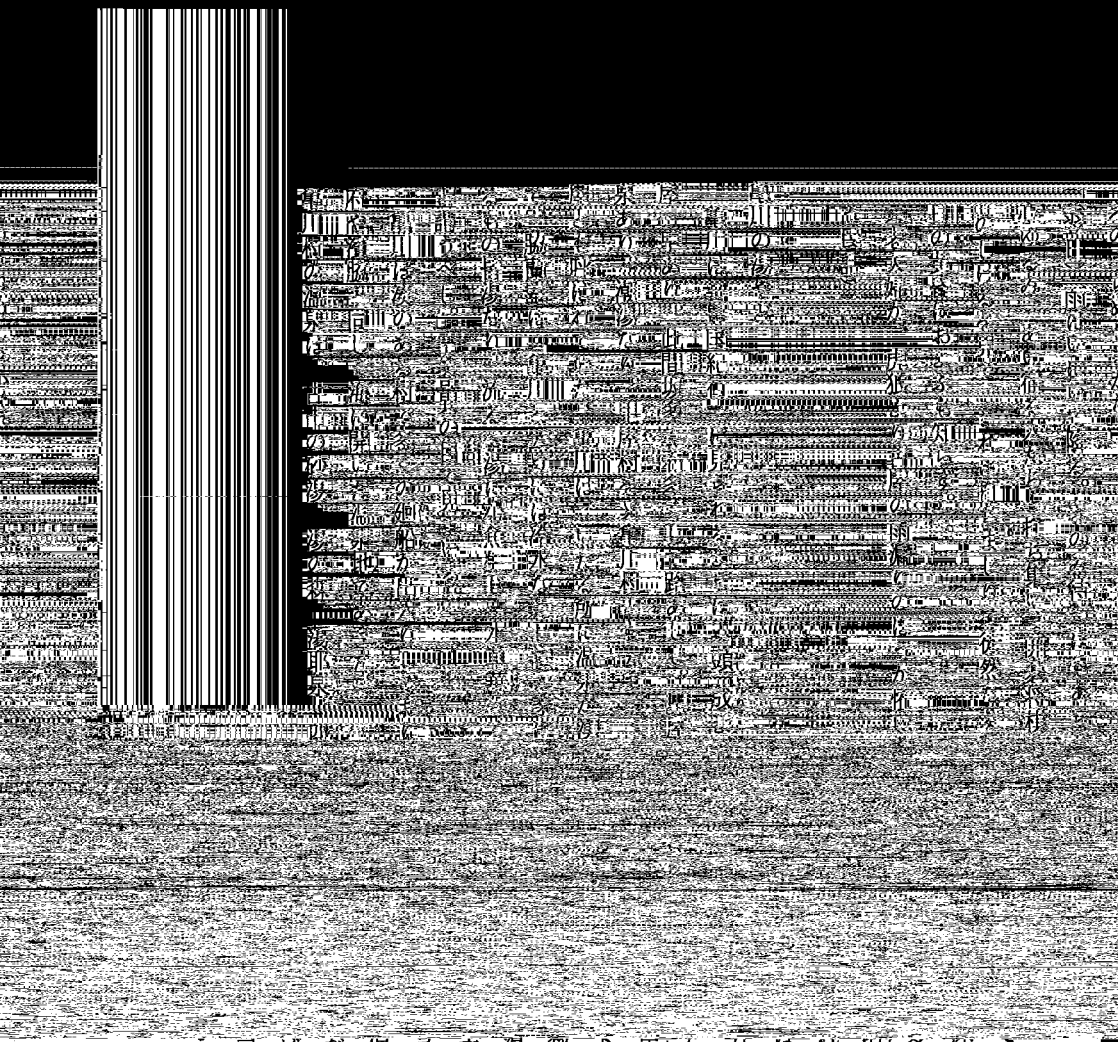
○明礬山の湯

も経ぬものかとみ

彼の薬師の瑠璃(るり)壷

こと十八町余。渓河この湯春三月末の初陽気しずむ頃には出山より土中を遥かにく湯も和らかにしてあるが故に、旅人みして入浴の人なし。」

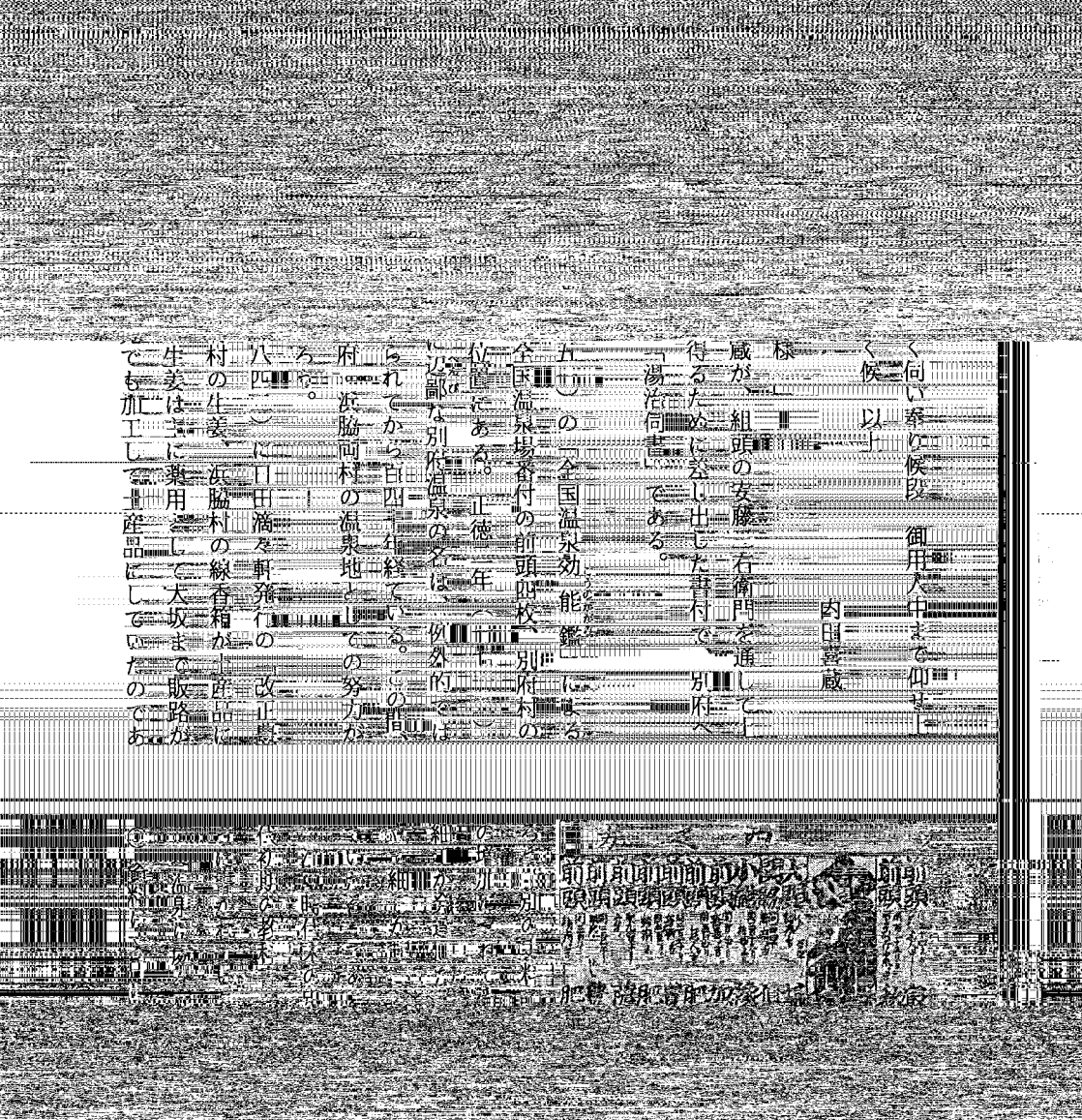
の法力で地獄原の噴。石風呂の蒸湯をはいて埋めたといわれる渋の湯など上人開噴気の音を身近に聞



も湯の森の温泉は、八幡竈門神社の神
浴を禁じていたとされるが里人の伝説
のお告げで沸いた湯で、竈門神社七坊
に供した出湯であるという。別名御夢
る。

は、日出の帆足門下で本草学を学んだ加
五年（一八三四）、日向の高千穂山群へ
たときの記録の『高千穂採草記』に
里屋ニ至ル。此ノ郷温泉多シ。先生名ノ
下云ハ近年新屋ヲ構シ、又客所ヲ設ケ遠
数十人。予従者ヲ待ツコト久シク従者初
温泉ニ浴シテ後レタリト。石垣原ヲ過ギ
吉弘ノ古墳ヲ拝シ、別府ニ至リ宿ニ投ジ
ヲ買イ従者ヲ労ス」。

保十一年に歳の神の境内に新湯を引いて
が、費用はその年の夏に博打をした若者
げた罰金を基にしたのである。湯耶が
ぎ流す。」という意味であれば、万里の
えたものであると言わねばならない。



く候以上

様に感が組頭の安藤右衛門を通して待るために差出した書付で別府へ

湯治伺書」である。

肉用豊感

く伺い奉り候段

御用人中まで仰せ

の「全国温泉効能鑑」にも載る

全国温泉場番付の前頭四枚目、別府の

位置にある。正徳年

辺部な別府温泉のそれは

例外的

られてから百四十年経っている。この間、

府浜脇両村の温泉地としての努力が

八四

村の生姜、浜脇村の線香箱から

生姜は

でも加工して

に田満々軒発行の改正

産品にして

販路が

あった

細
細
細